

*ダムに沈む村(岐阜県揖斐郡徳山村) 訪問記*****

全村水没前に無気力、内紛……………

無条件降伏の悲劇



徳山村中心を望む▲



揖斐川本流(徳山)

岐阜県揖斐郡徳山村は、木曾三川のうち一番西を流れる揖斐川の最上流に位置し、北の境界を福井・岐阜両県境の分水嶺にもつ、山また山の寒村である。広大な村域は、豊田市から旧高岡町を除いた面積に匹敵するが、谷合に点在する八つの部落には、五百世帯、千七百余人が住むにすぎない。弥生・縄文の歴史を持つ古い村だが、世帯当り人口は三・五人と、新興団地並みである。若い者が村を棄てたからだ。

この村は間もなく、世界第三位、東洋一の巨大なロックフィル式ダム(五十二年着工、五十七年完工予定)の湖底に没し、地上から姿を消すことになっている。私達が徳山村を訪れたのは、反対運動皆無のまま、全村水没・離散の悲運を受け入れた村の事情を知りたかつたからである。

私達は、ここ当分の間ダムと道路を濫造する列島改造を中止し、昔の水と空気を取り戻した方がいい、そうするためには、

生活水準を落としても生産活動を抑制した方がいいし、高度成長期につけた生活のゼイ肉は切り捨てるべきではないか、と思う。この町の市政もそう行うべきで、そのために「反進歩主義」のレッテルを貼られてもいいではないか、と思う。

そういう立場から、足助町内に予定されている巴川ダムの建設に反対してきた。今回の徳山行きも、昨年の板取村訪問も、そのための勉強であった。

若い者がいないせいだろう、徳山村の空気はよどんでいた。秋の早い山地ゆえ、九月下旬はもう、稲刈りたけなわであったが、のどか、という雰囲気ではない。活気を欠いて寂しさだけが強く感じられる。村役場の職員も老令化しており、中年過ぎの男が窓口に出ている。

流出が底をついたせいとか、もう急激な人口減は見られないが次代をになう生徒数の減少は今も続いており、早いスピードで「廃村」に向っている、という印象だった。世帯数だけは若干増



▲2年に1度は葺きかえ
いた草屋根もトタン
ぶせて(戸入部落)

◀石コロボかりの畑にイモ、豆、ソバが植えてあった(戸入部落)



名勝地「坊主平」を望む(戸入部落)

える傾向にあるが、これも、水没補償目あての帰村らしい。昨年訪れた板取村は、長良川の水源地帯を支配する福井県境の広大な過疎の地で、全村水没の予定地だったが、役場の姿勢と村の雰囲気は、徳山と対象的だった。役場には「全ての権力に屈せず、父祖墳墓の地を護れ」と大書した過激な看板が建ち、三十代の村長先頭に全村一丸の反対運動が続いていた。

役場では若い娘職員が応待に出していたし、村内には、「大豆を播こう」だの「板取川の清流を守ろう」などの標語が、やたらと目についた。文句は忘れたが、長寿の秘訣を書いた標語まであった。

若い衆達が出入りするバー風の飲み屋が各所にあつたし、村は、川沿いの最上流の部落に村営体育館を建て、上流部の寂びれるのを防いでいた。

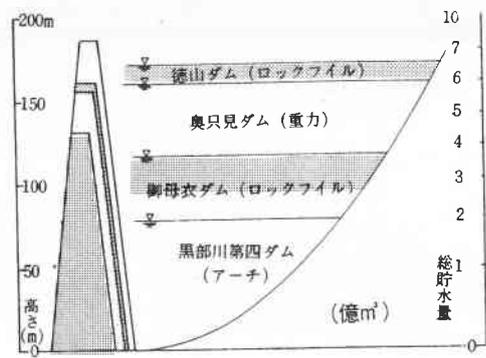
徳山村の人達も、板取の実情を知っていたが、「雪が深く、働きに出る場所も遠くて、板取村より条件が悪い」と言うだけであつた。それは水没を受け入れることになつた理由の一つには違いないが、徳山村には、他の道を追求めるだけの力がないのが実情で、無気力が村全体を支配していた。そのことが、補償交渉にも悪影響を及ぼし、補償金額はおろか、水没をまぬがれて残る共有山林二万ヘクター(町歩)の処分方法も、未だ決っていない。

徳山村の人達はいま、収入金額も明示されぬまま、村から示された移転先の物色に出かけている。共有山林の処分や補償金額をめぐる内紛が、これに続くのではないかと心配する人達が多かった。

徳山ダムの計画が発表されたのは昭和三十二年、高度成長の最盛期・四十六年に全村一致で受け入れを決めた。そして、全村水没の離散は、定安成長と言われる不景気の最中に行われる。就業人口の平均年齢は五十才

の目途はついていない。しかし水没を前提の生活を永年続けてきたこの村には、方針変更して好機到来を待つだけの力がない。生活の道を選択する力を失い、一方的に押し流されていく感じだ。しかも、内紛により村の団結が更に弱まる可能性は充分ある。

十数年前に、村再生の道を放棄し条件も決めずにダム建設受け入れたことが、今後、二重三重の悲劇となつて住民を襲うのではないか。



(水質調査会)